



上手な野菜の育て方 キュウリ



1 栽培時期と品種



2 栽培上の注意点

- ①キュウリの根は長さ2mにもなるが、地表に浅く張る性質があります。土の中へ深く根を張らせるために、有機物を多く施し、深耕するとともに、水はけを良くし、夏の高温乾燥期には、敷きわらや敷き草をして根を丈夫に育てましょう。また、1度に多くの肥料を施すと肥焼けするので注意して下さい。
- ②キュウリを旺盛に育てるには、多くの肥料と水分が必要で、追肥は生育や収穫量に合わせ定期的に施すとともに、土壤の乾湿の差を少なくすように管理を心がけましょう。
- ③本葉2~3枚が植え付けの適期で、双葉がついている苗を選びましょう。本葉2~3枚で、根鉢が回る前に植え付けると活着が良いでしょう。

3 敷づくり

植え付けや種まきの20日程前に基肥を施し、畠幅は仕立て方によって広さを変えて下さい。狭ま過ぎると光や風の通りが悪くなっています。病気も出やすく、落花したり不良果になったりし、子づるや孫づるの発生も悪くなります。水切れしやすいのであまり高畠にしないこと。目安として、畠幅: 150cm 条間: 80cm 株間: 50~60cm 植条: 2条 仕立て: 1~2本

4 種まき・苗づくり

直まきはまく所をやや高くして1ヶ所2~3粒まきにして、切りわらを薄く覆い十分灌水をする。間引きは、生育に合わせ順次行い最終本葉3~4枚で1本にして下さい。
育苗は、直径12cmのポリ鉢に2粒ずつ直接まくか、トロ箱にまいて本葉の出始め頃にポリ鉢に植え替えましょう。夜間の温度が12℃より下がらないようビニールトンネルで覆い、保温に努めましょう。間引きは、本葉1~1.5枚の頃に行い1本にして下さい。

5 本田肥料

畠づくり時に基肥として、3.3m²(1坪)当たり牛糞堆肥13kg、苦土セカル2号300g、野菜専用化成250 500g、BMようりん200gを全面に施し、深くすき込みましょう。追肥は1回目を収穫の直前(最初の雌花の咲いた時)に、その後は10日毎に野菜専用化成250 70gずつを条間や畠の肩面に施して収穫終期まで継続して下さい。
夏の高温乾燥期には、肥料を水に溶かし液肥で灌水と兼ねて施すと効果が高くなります。



6 定植

本葉2~3枚に発育した苗を、暖かい日を選んで根を傷めないように畠幅や仕立てに合わせた株間で、苗の株元をやや高く植えましょう。植え付け後すぐに、竹ひごを交差させて仮支柱をして十分灌水して下さい。

7 支柱立て・誘引・摘花・子づるの整枝・収穫

本葉5~6枚になったら、本支柱を立てます。240cmの支柱を株元から20cm離し、三角錐になるように、土に40cmくらい斜めにさし支柱の上を麻ひもで縛って束ねてからつるに麻ひもをかけて支柱へ誘引しましょう。
親づるが伸びたら、螺旋状に巻きながら丁寧に支柱へ誘引し、麻ひもで支柱に止めます。この時、葉が下を向いていても翌日には上を向きます。親づるの下から3~5節までに雌花がついたら、早めに摘花して株が疲れないようにします。親づるの3~5節目から出た子づるは切り落とし4~6節目以降の子づるは雌花を2つ残し、その先に葉を1枚残し切り詰めます。品種にもありますが、初期は長さ10~15cmで早めに収穫をし、安定して実がつくようになったら長さ18~20cmになった実から収穫すると良いでしょう。

8 病害虫防除

病気はべと病、うどんこ病の発生が多い為、連作を避け、排水をよくし、肥料切れしないように管理しましょう。害虫ではアブラムシ・ハモグリバエ・ハダニ類の発生があります。寒冷紗などによって飛来を遮断したり、光反射マルチを行い周辺の雑草についても除去し、収穫後の残さを必ず処理しましょう。



べと病・うどんこ病防除	ハモグリバエ
ダコニール1000倍 収穫の前日まで使用可能 8回以内	アファーム乳剤 2000倍 収穫の前日まで使用可能 2回以内
アブラムシ	ハダニ
スミチオン乳剤 1000倍 収穫の前日まで使用可能 5回以内	マラソン乳剤 2000倍 収穫の前日まで使用可能 3回以内